

視力障害者と社会の関連性について

43期生

I テーマ設定の理由

私達の日々の暮らしと目は、密接なつながりを持っているものである。ところが世の中には、不幸にも目に何らかの障害をもち、色々な面で不便な生活をおくっている人も沢山いる。その人達にとって、今の社会のどのような点が不便か、そしてその人達に対して国や企業のとっている特別な対策はあるのだろうか。また、家という住宅空間において私達も工夫できることはないか。

これらの疑問を調べるために、このテーマを設定した。

II 研究方法

- 1 文献調査 身体障害者住宅と普通の住宅のカタログとを比較し、それぞれの長点や欠点を挙げる。
盲導犬育成に関する財団の育成費や人手に関する資料を探す。
- 2 現地調査 町の中における視力障害者に対する工夫点・危険な点を探す。
駅長・眼科医等に就職面に関して質問する。

III 研究内容

1 視力障害者と社会

(1) 視力障害者とは

視力障害者は正確には視覚障害者と呼ばれ、この視覚障害者の中でも1級から6級というランクづけがされている。現在日本には約30万7千人の視覚障害者がおり、うち17万4千人は全盲だという。では残りの人はどのような障害を持っているかという、視野・色覚障害や弱視・屈折といわれる障害を持っている。

みなさんの中には、盲導犬や杖をもっている人ばかりが視力障害者だと思っていた人もいたことだと思うが、実際にはそうでないのである。

(2) 視力障害者と社会

① 公共施設での工夫

以前、日本ライトハウスの日比野所長に話をうかがった時、「視覚障害者のかたの生活の中で最も困難かつ危険な場所は、段差のある場所ですね」と聞いた。

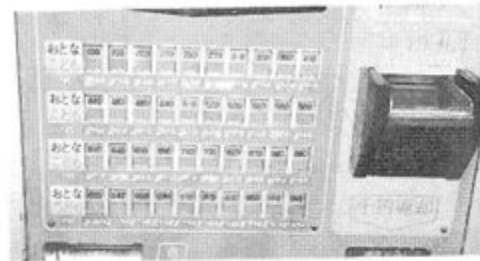
ちょっと考えてみて、私達の生活の中で段差のない家や駅や道があるだろうか。もちろん、そんなものはあるわけがなく、階段等は特に段差が激しい。

ではせめて工夫はできないか、というのでまず公共施設として、駅と道路について自分なりに工夫点や欠点を探してみた。判断の基準は、余計な段差の有無・危険な場所の確認が可能か等である。

・結果・

▼図1 公共施設の比較

	長 点	欠 点
駅	点字ブロック・シールの利用	切符自動販売機まで遠いところがある。ラッシュ時の人混みがある。
道	歩道と車道の区別がある。	段差が多く、床がでこぼこである。



▲図2 点字シール

結果は図1のようになった。駅の欠点で、ラッシュ時の人混みがあるというのは、駅のホームが混雑し、点字ブロックの上に人がいたりして、視覚障害者が点字ブロックをたどって歩く事ができないということ。点字シールというのは、でこぼこした白い点がついているシールで、ほとんどの駅の切符販売機と、階段の手すりについている。(図2参照)

② 公共物での工夫

主なものは、日本国内で使用されているお金と公衆電話がある。

現在日本で使われている硬貨や紙幣は、図3のように大きさや穴をあけたり、す

▼図3 硬貨とお札の工夫

硬貨	大きさ	穴の有無	側面のギザギザ
500	大	なし	なし
100	普通	なし	あり
50	普通	あり	あり
10	普通	なし	なし(一部あり)
5	普通	あり	なし
1	小	なし	なし

1万円	5千円	千円

かしぼりによって何円のお金かすべてわかるようになっている。

また公衆電話というのは、緑の公衆電話のプッシュダイヤルの5のところに小さなポッチがあり、それを中心とするとちゃんとダイヤルがおせるようになっていてというものである。

その他の工夫としては、テレホンカードの工夫(矢印の反対側にはくぼみがあって、どちらが後ろか下かというのがわかるというもの)や、盲人信号と言われる、いわゆる信号が緑の時に音楽になる信号などがある。

③ 身近なものの工夫

身近なものといってもおもちゃであるが、1982年よりおもちゃのトミーが積極的に目の不自由な人にも楽しめるおもちゃを作り始めたのが、盲人用おもちゃの普及の始まりである。それ以来、日本玩具協会に『小さな凸凹委員会』というものができ、盲人用おもちゃのカタログをだしている。今年の6月にでたカタログには、36種類ものおもちゃが紹介されている。

これらの盲人用おもちゃができる以前は、日本点字図書館が特別に注文して、その後点字で説明書をつくるなどして加工したものが多かったため、手間や暇がずいぶんかかった。これらのおもちゃの特長は、手で触ってその形が何であるか、耳

でメロディーを聞いてどこにあるか等がわかるようになっている事である。実例では、トミーからでている黒髭危機一発ゲーム——樽に入った人形を飛ばさないように剣をさすというゲームや、日本地図パズル、メロディーパフボール——動物の形をしたボール状のぬいぐるみ、目鼻が立体的に作られており、転がすと音がでるといというものがある。



これらのおもちゃを使って晴眼者と視力障害者がゲームをするという行事が先日行われたが、そこでは同時に多数の盲導犬マーク(視力障害者用のおもちゃにはらわれているシール)のついたおもちゃの展示もあった。

④ 職業選択の自由

盲人訓練センターの倉長さんにうかがったところ、「現在、職業訓練をうけているのは25名の方なんです、その中には、コンピューターのプログラマーとか電話交換手・金属加工をしていらっしゃる人がいます。中には盲人ホームといわれる、針・あんま・灸・マッサージをしている方もいらっしゃいます。」と教えて下さった。このように視覚障害者に対する就職の門は開かれつつはあるが、実際のところはまだ職業制限が残っている。

男女別では男は三療(はり・灸・あんま)、女は主婦が最も多い。

⑤ 国と盲導犬

このような視覚障害者に対して国は何をしているのか、というのはあまり知られていないが、視覚障害者が白杖や盲導犬をもつという事は国の法律で決められている。そのため国は視覚障害者のための盲導犬育成費の一部をまかなっている。

現在日本には約650頭の盲導犬が、全国に10個ある盲導犬訓練センターを卒業して働いている。しかし、17万4千人もの全盲の視覚障害者に対する普及率は、0.37%である。アメリカには7000頭、イギリスには3700頭もの盲導犬が働いているのに反するこの差の発生は、国からの補助費が少ないからである。ある盲導犬協会の理事長は、

二億円基金という事を望んでいるが実際は無理だそうだ。

盲導犬育成の際、赤字がでた時はどうするかという、ほとんどの場合が募金でまかなわれる。図5より様々な種類があるのがわかる。これらの募金の中で病院に募金箱を設置するというものがあるが、その1年間の成果は一件でおよそ1万5~6千円になる。また、ユニークな募金活動として、テレホンカードを売るなどや、コンサート等をひらいて視覚障害者と晴眼者が共に楽しめる等といった募金もある。

収入		円
前年度繰越金	175,142	
コンサート売上	3,939,320	
テレホンカード売上	360,000	
阪神友の会	1,000,000	
〃	200,000	
預け金利息	18,065	
受取消費税	118,180	
合計	5,810,707	
支出		円
コンサート経費	2,617,683	
募金箱作成費	147,500	
事務雑費	51,015	
支払消費税	77,880	
次年度繰越金	16,629	
合計	2,910,707	
差引本部会計繰入	2,900,000	
一般寄附金	4,644,060	
奨助会費	12,193,873	
募金ピシ	27,289,915	
特別募金(リフレッシュ募金)	35,188,000	
総計	82,215,848	

▲図5 募金活動の収支

2 家庭における工夫

一番私達の生活と密接に関係のある生活の場所として挙げられるのは、やはり家であるだろう。



▲図6 玄関

① 玄関

横の図6は生涯住宅の玄関だが、靴をぬぐ所に段差がない。では視力障害者の人はどこで靴をぬいでいいかわからないし、靴を座ってはく事ができないのではないか。このような問題点は、色々な工夫で解消されている。例えば、図6の左はしの方に手すり兼いすのようなものをつけたり、タイルを使いわけて、その場所で靴をぬぐということを示したりしている。またドアは引き戸で入口はスロープである。

② 水まわり

下の図8をみてもらいたい。まず工夫の第一点として、扉の部分は全て引き戸になっている。しかし工夫点はそれだけではない。いつも水を使っている水まわりではぬれた床で滑ってケガをするという事故がとても多い。そのために、洗面所の床にはぬれても滑らないマットを使用しており、危険な場所には手すりもついている。またつまづいてこけることのないように、段差の部分は全てスロープにしている。

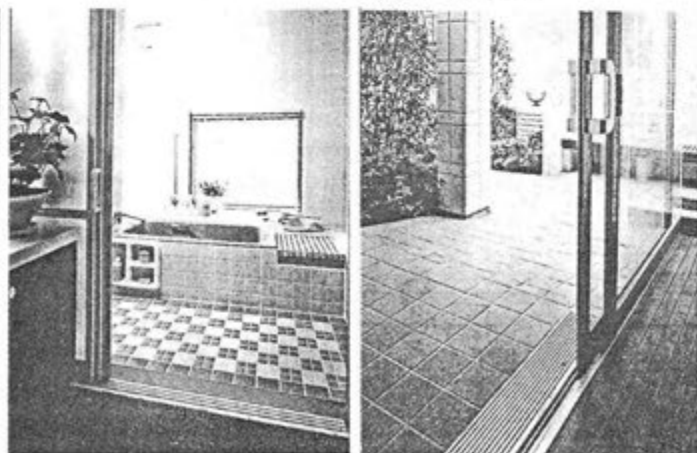
③ その他の工夫

今までの各場所の工夫で何回もでてきたのが、段差のスロープ化である。今までの例は全て生涯生活住宅の一部なので、主に車イスに乗ったような老人に対しての工夫なのだが、自分の目でその場の状況を判断できない視覚障害者の方は、段差の所在地やその高さ等がわからないため、つまづくことがある。そのような事からスロープの使用はととても有効であり、安全性の確保のためのよいアイデアであると言える。しかし、家の中では絶対に必要な段差もある。例えば階段だが、階段をス

▼図7 水まわり



▼図8 出入口



ロープにするととても急な坂になってしまう。だから階段には安全のためにゴムのすべりどめをつけ、両脇に手すりをつけるなどしている。その他の工夫として、ホームオートメーションというものがある。これはホームエレクトロニクスともいわれ、図10のまん中のランプの左上にある。室温制御・防犯・防災等の集中ホーム管理ができ、たいていベッドサイドにつけてある。



▲図9 ホームオートメーション

その他、似たようなもので電動シャッターといわれる電動雨戸も様々な所で使われている。

今まであげてきた色々な工夫は、表面上とても便利なものであるが、実際これらのような設備をつけるためには驚くほど莫大なお金がかかってしまうのが欠点である。

3 これからの社会

今まで様々な工夫をあげてきたが、それらの工夫には沢山のお金がかかるという欠点がある。そして私達すべてが、視力障害者を含む全ての障害者に対して、あまりにも無関心すぎる。私達は何の障害もないから、という意見を持っている人がいるのではないか。そんな意識を改善するため、最近沢山の視覚障害者に関する催しが開催されている。10月上旬には『国際盲老人大会』が行われ、欧米から在宅介護のノウハウを学んだり、発展途上国にも盲老人福祉の輪を広げようと討議し、結果をWHOに提出した。また11月1日の犬の日（ワンワンワン）に、日本ライトハウスが中心になって『盲導犬を一般の人に理解してもらおう』と全国八ヶ所でキャラバンをスタートさせた。

一方、視覚障害者の人達もせまき就職の門をくぐろうと頑張っている。今年の夏に全盲の視覚障害者で全国初で「国内旅行業務取扱主任者」に合格した男の人は、大手旅行会社の入社試験の際、「事故が心配だ」といわれ、門前払いをくって来た。この人は運輸・厚生両相に直接陳情をしたが、結果はどうかよくわからない。反面、今年の司法試験に『4度目の正直』で合格した視覚障害者の方もいる。

このように改善されつつある社会にも、まだ差別意識が残っている。これからの社会を控えて、まず私達の意識をかえるべきだ、と日比野舎長はおっしゃった。

IV 結論

体の一部が不自由なだけで、様々な形の差別を受ける人々に対して、世間はあまりにも厳しすぎたのではないか。そしていま徐々に改善されつつある社会で、特に視覚障害者に対して様々な工夫がなされつつある。盲・老人に対する安全性を兼ねた家や小物等。しかしそれらは大量生産されるものではないため価格は高く、普及率も低い。また視覚障害者の手や足となるはずの盲導犬においても、現在の実施数は800頭で、普及率も1%未満の状態である。これらはやはり国家の財政と、国民のボランティア意識の不足が原因であるといえるだろう。

これからの社会において必要なことは、「人々の心から差別をとりのぞき、障害者も

そうでない人も共に手を取りあえる理解」であるといえる。しかし本当にそれだけで人々の心から差別がなくなり、障害者の方も私達と同じように生活ができるかと言えば、決してそういう事はない。なぜなら障害者の人が自立して生きてゆくためには莫大なお金や、沢山の人手がかかり、実際にはできない事だからである。

これからの社会において私達がすべき事は、物品・金銭的な援助もそうであるけれども、何よりも“知ろう、わかろう”と自ら関心をもつ事ではないかと思われる。

V 総括

三年間を通じて目に関する事を調べてきて、今回がそのまとめ的なものになったが、自分の興味のもてるテーマを調べたてよかったと思う。

残念なのは、このテーマが『これからの社会について』というもので、空想的なものとなってしまう、文献や自分の考えで進んでいってしまった事である。

研究全体に関する感想は、知られていないところに大きな差別があるんだなあと思った事で、特に就職についてはその厳しさや、企業の考えに対して色々な意味でのショックがあった。これからの社会がいったいどのように変貌していくかは誰にもわからない事だが、今までの研究を踏み台に、違う角度から障害者に関する社会を見れるようになりたいと思った。

VI 参考文献

- ドキュメント盲導犬・自立への苦悩と愛の記録・ 蝸牛社・荻野 功著
1982年8月25日初版
- 歩けアイメイト・盲導犬に賭けた三〇年・ 東洋経済新報社・塩屋賢一著
1981年10月10日発行
- フロックスは私の目・盲導犬と歩んだ十二年・ 文藝春秋・福沢美和著
1989年1月20日初版
- 母と子のための視力読本 浪速社・潮崎 克著
木造一億円住宅 扶桑社
毎日新聞・朝日新聞・毎日小学生新聞